特集

追い込み漁の自然観

文：川島 秀一（神奈川大学特任教授）

主に沖縄や奄美諸島で、細々と続けられている追い込み漁。その始まりは、磯に寄ってきた魚を捕る漁で、自然を読む眼力が必要とされた。また、追い込み漁で捕った魚を神様にささげたことから、宗教的な儀式としての側面を、当初から持っていた。さらに、群れている魚を集団で捕ることから、共同体としての地域のきずなが必要だった。
しかし、今、追い込み漁は少子高齢化という社会問題の影響を直接的に受けて、廃絶の危機に直面している。全国を歩いて、消えてしまった追い込み漁、まさに風前の灯火の追い込み漁を研究している川島秀一神奈川大学特任教授に、その成り立ちや自然との深い関わりを中心に寄稿していただいた。

海鳥になった男たち

漁船の設備が加速的に機械化された現代の漁業においても、その機械の呼称は、その土地ごとに違っている。山陰のある漁村では、魚群探知機のことを「デンタン（電探）」と呼んでいた。沖縄県伊良部島の佐良浜の漁師は、GPSのことを「エイセイ（衛星）」と呼んでいる。生活の中に機械が受け入れられている状況がわかるが、それでもなお、実際の魚やクジラなどの海洋生物を海上から探し出すには、体全体が目になるような身体感覚が必要である。

海上を航行しながら何を目当てにするかといえば、それは海鳥である。カツオ船でも小型沿岸捕鯨船でも、探すのは潮目に漂う小魚を狙おうとして群れている海鳥である。もし、この大洋に鳥という生物がいなかったら、漁業という生業は、はるか沖の海上まで乗り出すことはなかったであろう。

たとえば、カツオ漁の場合は、マトリ（オオミズナギドリ）などが、海上と海底からイワシを追い込み、イワシの群れが集められる。そこにカツオの群れが来て、ときにはジンベエザメやクジラも近づき、これらの魚や海洋生物を発見することも、カツオの群れがいることの指標になる。「ジンベエ釣り」や「クジラ付き」とも呼ばれ、大漁が約束された。

ミンククジラの場合は、イカナゴを空と海底から追い込むウトウ、あるいはアミを狙う海鳥などが、一種のフィッシュボールを作っている状況を発見すると、そこへ向かって捕鯨船を進ませる。その大きな魚の団子をねらって、ミンククジラが来る可能性が高いからである。

宮城県の気仙沼地方では、ヨド・シラス・コウナゴ（いずれもイカナゴのこと）を捕る漁のときも、ハナダカ（ウトウ）やハハスズメ（ウミスズメ）が、海中で追い込み、魚の島のようなエドコを作るのを、ひたすら待った。エドコができると、船首に付けた、掬い網の一種のサデ網でそれを捕るのが、ヨド漁の基本であった。

このエドコのことを、牡鹿半島ではイケ、伊勢湾の答志島ではエエと呼び、伊勢湾で活躍する海鳥はウミウやウミスズメである。さらに答志島では、このエエを漁師がウミウと一緒になって作る。手にはウミウの羽根を付けたウザァ（鵜竿）を操業中の海底に挿しこむ（写真1・2）。

列島の追い込み漁は、この鳥が魚を追い込むという自然の観察から始まった

写真1●ウザァを海中に挿し入れることで、コウナゴを追い集める

写真2●ウザァの先に付けられたウミウの羽根

ものと思われる。川漁でも、鵜飼いなどはウミウ自体を飼育して魚を捕る漁法であるが、棒の先にカラスの羽根などを付けた「鵜竿」や、縄に間隔をおいて鳥の羽根を付けた「鵜縄」などが用いられていた。この「鵜竿」や「鵜縄」は、海漁にも応用され、最終的には、沖縄の糸満で確立されたアギヤーと呼ばれる追い込み漁のように、人間自らが「鵜竿」のようなものを持って海中に潜って魚を追い込むまでに発達した（写真3）。つまり、人間が海鳥になって追い込むことができるようなったのが、追い込み漁の到達点であった。

追い込み漁の特色

追い込み漁の基本的な性格は、磯魚を捕る沿岸漁として出発している。しかし、近海にいるマグロやイルカなどを小湾や岸に追い込み、断切り網で湾口を塞いで捕った場合も多い。湾や岸などに追い込むということは、魚を深いところから浅いところへと追い込むことにも等しい。

それは、沖縄の追い込み漁であるアギヤーが「揚げる」という言葉と係わりがあるように、魚を捕る人間にとっても、潜水病などの危険が伴わない、操業しやすい安全なところに魚を導いてから捕る漁が追い込み漁の特色であった。つまり、沖から湾や岸へと水平的に追い込むだけでなく、深いところにいる魚群を浅いところまで追い込んで捕るという垂直的な意味合いも含んでいる。ただし潜水病は、潜水服を着て空気ボンベを背負い、一日に何度も海に潜るようになってから発生率が高くなったといわれる。追い込み漁の漁師さんたちは、潜水病のことを「打たれる」という言葉で表現しているが、裸で潜っているときは、むしろ打たれることが少なかったという。

追い込み漁のもう一つの特色は、群れている魚を、集団で捕るということにある。人数が多ければ多いほど、漁獲量が上がり、そのために村人のほとんどが参加する、集落で所有の共同網も多かった。ところが、現在、漁船の機械化が進んだために操船や漁撈技術が、誰にでもすぐに、できるようになったことで、遊漁船や俄か漁師が増えてきた。個人漁が増え、それぞれが船を持ち、餌を撒いて捕るために、魚自体が群れることが少なくなったという。魚も群れなければ、人間たちも集団で操業することがなくなった。追い込み漁が廃止されていった原因の多くは、この人員が確保されなくなったことである。つまり、沿岸の集団漁の衰退でもあり、人間のつながりの深かった漁村自体も揺るがすような出来事だったのである。

沖縄の島々ではそれでも、祭礼のときなどに、村の大半の男たちが沖に出て、神様に上げる魚を追い込み漁で捕っている。その理由は、追い込み漁は基本的に、海の沖から岸に寄ってきた「寄り物」の魚を捕る漁だったからである。

その日に神様から与えられた魚を、そのまま簡便にいただくという漁が当初の追い込み漁だったからで、祭礼や信仰に深く関わりがある漁撈であったことが、第三の特色になるかと思われる。

写真3●伊良部島の佐良浜では、白いテープを付けたナカイシ（スルシカー）を持って海中に跳びこむ

写真4●久高島のスクの追い込み漁

たとえば、旧暦の六月・七月・八月の一日前後に、沖縄本島などに必ず到来してくるスクの追い込み漁などが、その典型例である（写真4）。久高島では、この漁を采配するソールイナガシと呼ばれる役職は、スクの到来の過多によって、その人望まで評価されたという。スクのようなユイムン（寄り物）は、神様が贈ってよこしたものだからである。

「寄り物」の分け前は平等が原則であることから、追い込み漁で捕る魚も、祭礼の魚などの公共的なことに使われることが多かった。鹿児島県阿久根市の黒之浜のように、ムラで漁港の波止を造ったときの借金を返すために、年に何度もタイやイサキを捕る大型のカズラ縄を用いた追い込み網を回したところもある。

追い込み漁具の変遷

魚を追い込む漁具も多様である。基本的には、「打ち石」などと呼ばれる石と、海面をたたいておどろかす「タタキ棒」などと呼ばれる棒である。石は答志島のコウナゴ漁や、五島の福江島のボラの囲い刺網漁でも欠かさず、船に積んでいく（写真5）。棒で海面をたたく漁となると、「タタキ網」と呼ばれる漁法が全国的に見られる。福井県の三方湖で行なわれている、コイやフナのタタキ網などは、その典型である（写真6）。沖縄では、リーフ内で、同様に海面をたたいて魚を追い込む漁のことをパンタタカーと呼んでいる。タイの地漕網やサワラ瀬曳網で使われるテンボウや、和歌山県でアオリイカやトビウオを網に追い込むときに使われるオカタ棒なども、その材質はカシなどの固い木が多い（写真7）。

先に述べた「鵜竿」や「鵜縄」を用いる漁も数限りなくあるが、「鵜縄」から発達したのが「カズラ縄」という漁具で、特に瀬戸内海のタイ網で盛んに用いられた。地漕網までは、岸に追い込んでいたが（写真8・図1）、「しばり網」（図2）になると、沖での操業が可能になった。沿岸漁であったはずの追い込み漁が新しい展開を始めたのである。また、ゴチ網（図3）という網も沖での操業を可能にした網である。

写真5●福江島のボラの囲い刺網船に積まれた石

写真6●福井県三方湖のタタキ網

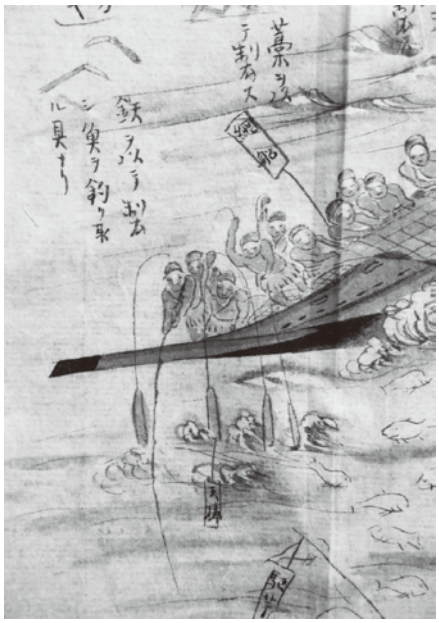


写真7●サワラの大網に使われた「天棒」
（「明治八～十一年水産例規漁業旧慣調」、愛媛県立図書館所蔵）

写真8●「地漕網」の図
（「明治八～十一年水産例規漁業旧慣調」、愛媛県立図書館所蔵）

図1●地漕網

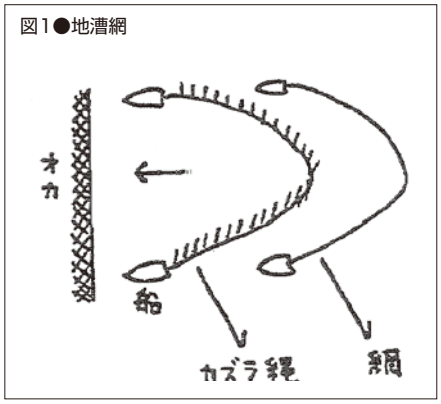


図2●シバリ網

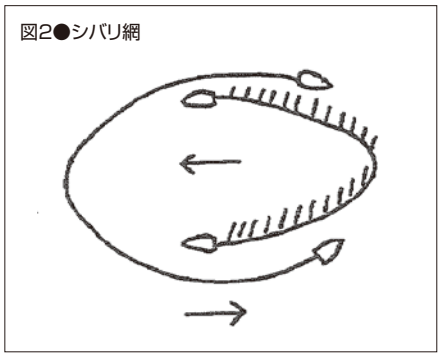
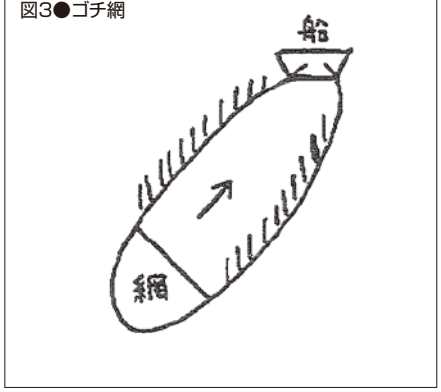


図3●ゴチ網



これらの網に必ず使われる「カズラ縄」には、細長い白い木を、ある間隔で吊るし、両端を船で引くことで魚を網の中へとおどしていく。この木のことをフリキ・ブリキ、あるいはブリと呼んでおり、クサマキやヒノキなどを材料とするが、瀬戸内海を離れると、エゾマツ（東京湾）、ヒメタラ（壱岐）、ネムノキ（天草）、ハマユウ（甑島）など、地方によって様々である。

これらの「カズラ縄」で魚を取り囲む前に、人間が潜って魚を追い込むところが、福江島や甑島にあった。それが、沖縄の糸満から伝わったとされるスルシカーの系統である。

スルシカーは「カズラ縄（沖縄ではチナカケヤー）」を小型にして、個人が手に持って追い込むような道具であり、縄に吊るすのは、クバやアダンなどの葉が多かったが、最近は白いビニール紐を用いることが多い。沖縄の漁師が追い込み漁を伝えた、伊豆諸島の新島の大掛網では当初、スゲやグミの葉を用いたが、最後は杉板に白いペンキを塗って用いた。静岡県沼津市の内浦でも、イサキの追い込み漁である「揚げ網」に同様のものを用いた。これらをヘラともいう（写真9）。熱海沖の初島のバッカイ網や神津島のキンチャなどの追い込み漁では経木を用いている。

ところで、鹿児島県の与論島の出身で、追い込み漁の漁師として新島に定住することになった村上園治氏の夫人のキミさんは、今でも園治氏の使用した水中メガネを所蔵している。この水中メガネの発明も、追い込み漁の発達には欠かせないものだった（写真10）。明治17（1884）年に、糸満の玉城保太郎により、ガラス板をモンパの木に嵌めたミーカガンが発明された。海底での漁師の目を守り、魚の行動がさらに詳しく認識できるようになった。追い込み漁を強く推進させた出来事でもある。

「自然」に勝つか負けるか

追い込み漁は魚を一網打尽にする人為的な漁と思われがちであるが、先に述べたように、基本的には「寄り魚」を捕る漁である。シオの流れにそって、どのように網を入れ、どのように魚を追い込むか、状況が毎日違うだけに、自然の読み方に対する適切な判断が要求される漁法である。

新島の追い込み漁である大掛網に最後まで関わってきた石野佳市さんは、大掛網の基本は「その日の魚との格闘で、自然の流れに勝つかどうかだと思う」と述懐している。「魚との格闘」と言い、「勝つ」という言葉を使ってはいるものの、それはタカベやイサキという賢い魚と直接的に向き合う歓びと、シオの流れを利用しながらいかに多くの魚を網に誘い込むかという難しさを語っている。それは、大きな自然の流れを遮断することでも、強引にねじ曲げることでもない。魚やシオの流れの只中に自分を置き、我が身も自然の一部であることを全体的に捉える視点がなければ、追い込み漁は成功しなかったことを語っている。

魚群との直接的な駆け引きを行なうことができる追い込み漁という集団漁は、その網作りや漁撈の技術とともに、この列島から少しずつ消えつつある。

写真9●静岡県沼津市内浦のイサキ漁で使われた追い込み漁具（沼津市歴史民俗資料館所蔵）

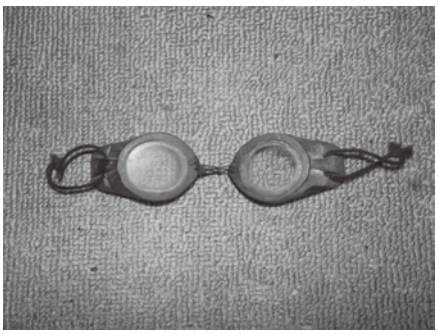


写真10●沖縄から新島に伝えられた追い込み漁のときに使われた水中メガネ（ミーカガン）

川島 秀一
かわしま しゅういち

1952年、宮城県気仙沼市出身。法政大学社会学部卒業。文学博士。東北大学附属図書館、気仙沼市史編纂室、リアス・アーク美術館を経て、現在、神奈川大学外国語学部特任教授・日本常民文化研究所研究員。

著書に「ザシキワラシの見えるとき（1999）」、「憑霊の民俗（2003）」、「魚を狩る民俗（2011）」（以上三弥井書店）、「漁撈伝承（2003）」、「カツオ漁（2005）」、「追込漁（2008）」（以上法政大学出版局）、「津波のまちに生きて（2012）」（富山房インターナショナル）、編著に山口弥一郎著「津浪と村（2011）」（三弥井書店）などがある。